

PhilSci Newsletters No. 1

Editor Ucci Uccini

創刊に当たって

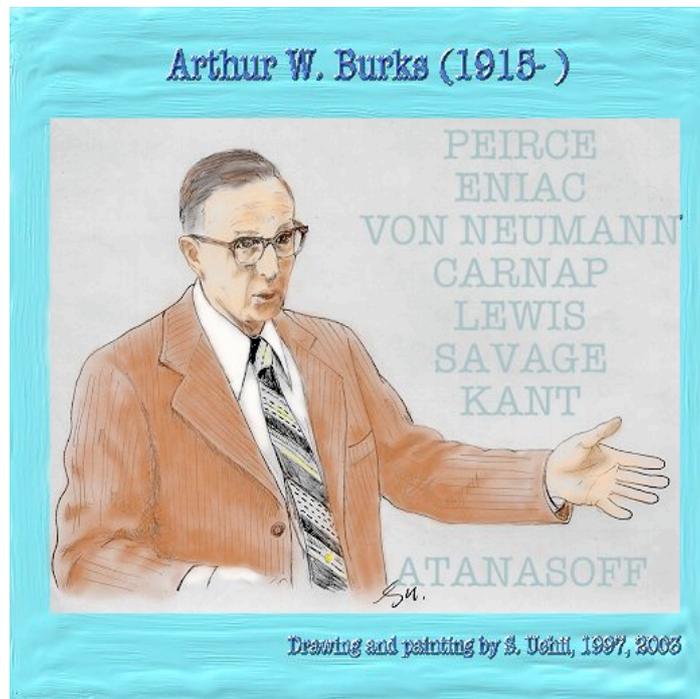
編者 Uccini が某大学文学研究科、某研究室に在任中、『科学哲学ニューズレター』というウェブ上の雑誌を60号まで編集して公開した。内容は、その研究室の活動、メンバーの研究報告や論文、書評などで、三分の一は英文で書かれたものだった。当編者が退職後、研究室ではこの雑誌を継続しなかった（それを非難するつもりはまったくない。新しいスタッフの方針だからそれは尊重しなければならない）ので、この二年あまり、続編は出ていなかった。最近、もとのウェブサイトに残っていたファイルも整理されてしまう模様となってきたので、当編者の個人的なサイトで古いファイルは再公表したばかりである。それが機となって、この雑誌を別の形で継続したいという意欲がわいてきたので、PhilSci Newsletters という新しいシリーズを刊行することとした。今回は、旧研究室とは関わりのない、純粋に個人的な営みである。ファイルの形式は、pdf ファイルとして、ダウンロードや印刷に便利な形にする。

While I was the chair at the Dept. of Philosophy and History of Science, Xxxxx University, I edited and published online 60 issues of PHS Newsletter. Since my successor has not continued this project, I decided to issue a new series of newsletters, PhilSci Newsletters, as one of my own personal activities. Each issue will be published in the form of pdf file, which will be convenient for download and printing.

創刊号 No. 1, Dec. 2, 2008

In Memory of Arthur W. Burks (1915-2008)

by Ucci Uccini



The first issue is my personal obituary on my mentor, Arthur W. Burks, who passed away on May 14, 2008. He was the last survivor of the ENIAC team at the University of Pennsylvania.

May 19, 2008: A. W. Burks (1915-2008)

おそれていた訃報が遂に来た。わたしの恩師、バークス先生が五月十四日に亡くなったそうだ。2002年にピッツバーグを訪れた際に、足を伸ばしてアン・ナーバーのご自宅を訪問したときは、頭は衰えておらずまだお元気だった。最近二年間は（アルツハイマー症で）施設に入っていたが、コンピュータの歴史に関わる「最後の本」を執筆中だったとのこと。ENIACチームの最後の生き残りだったのだ。

忘れもしない 1968 年、ミシガン大学での最初の学期、四つ登録した受講科目のうち、一つがバークス先生の「様相論理」の講義だった。それまで先生のこととは何一つ知らなかったのだが、様相論理には興味があったのだ。Chance,

Cause, Reason という後に出版された大著のタイプ草稿を使っの講義で、「因果必然性」という様相概念をつかっの条件法分析は、大変面白いものだった。これは、ストールネイカーやD. ルイスによる様相分析よりも三十年も早い、この分野に関心のある論理学者からはほとんど無視されてしまった。それはともかく、先生は当時、哲学の教授のほか、自分が創設したコンピュータサイエンスのチェアマンをしており、「アメリカにはこんなスゴイ学者がいるのか」と仰天してしまったのである。当時、フォン・ノイマンの未完の遺稿、「自己増殖オートマトン」を編集、完成させている途中だった。エニアックチームとのいざこざや、けんか別れした後のIAS コンピュータ開発の話などは、わたしが学位を取ってしばらくしてからいろいろ聞かされることになった。おそらく、アイオワで開発されたアタナソフ・ベリーコンピュータ (ABC machine) についても、調べ始めた頃ではなかったらうか。

最初の講義で何とか存在を認めていただき、二年目からはコンピュータサイエンスの予算から給金が出る「リサーチアシスタント」という名目で、原稿の校正作業を主とした手伝いに雇ってもらった。このときの経験が、わたしの学問的能力や英語力の鍛錬にどれだけ役だったか、計り知れない。倫理学を主としてやるつもりでいったミシガン大学だったが、「指導教官はこの人だ」と決め込んで、すんなりと学位論文まで突っ走ることができたのだ。この大恩人について、書きたいことは山ほどあるが、とりあえず今日はここまで。

[New York Times, May 19, 08 に死亡記事]



May 19, 2008: Continued

バークス先生と切っても切れない縁にあるのは、戦時中ペンシルヴェニア大学で開発されたコンピュータ、エニアックである。ニューヨーク・タイムズで先生の死を報じたページも、哲学ではなくテクノロジーのページだった。わたしが先生と知り合っただけでなく、一つ度肝を抜かれたのが、このエニアック、解体された一部がコンピュータサイエンスの学部のロビーに展示されていたことだった。解体されたマシンの一部は、スミソニアンにも展示されているが、先生の自慢は、「ここミシガンにある部分がかっこよくきれいに残されているんだ」ということだった。残念ながら、コンピュータサイエンスの学部は取りつぶされて、現在は電気工学の学部で吸収されてしまったが、このエニアックのサンプルは、現在では North Campus にある電気工学部のロビーに場所を移して、なおも展示されている。

哲学関係でバークス先生の名前を知っているのは、まずパース研究の人たちだろう。先生の学位論文はパースの哲学に関するもので、ハーヴァードの図書館でパースの遺稿を調べて書かれたものだったはずである。その縁で、パースの *Collected Papers, Vols. VII-VIII* は先生の編集になるもの。パース研究家でバークスの名前を知らない人はインチキ学者にほかならない。

そのほか、カルナップ、C. I. ルイスとの縁も深く、*Library of Living Philosophers* の両者の巻にはバークス先生の論文が寄稿されている（ご存知かな？）。また、確率の主観説で有名な数学者、レナード・サヴェッジとも一時期同僚だった縁で、バークスの確率の哲学は、主観説を一部取り入れたものになっているのだ（*Chance, Cause, Reason* を参照して少しは勉強してね！）。加えて、確率・帰納法の哲学ではカントやケインズの路線にも親近性を示し、五十年代には *Presupposition Theory of Induction* で『科学哲学』誌を賑わしたこともある。そして 1965 年、わたしが工学部から文学部に学士入学した頃には、インドからの帰り、京大の工学部で講演もしていたのだ（当時は全然知らず、後で聞いて驚いた）。

とまあ、学術的な話ばかりでは一般の人には退屈だろうから、もっと砕けた話に移ろう。先生の趣味の一つはボーリング。アシスタントだった頃、学校帰り

に「ひまかね？」と声をかけられて、大学のボーリング場に時々連れて行ってもらった。また、学校への通勤は毎日徒歩で、三十分くらいの道のりを帽子をかぶったダンディな姿で歩く姿をよくお見かけした。わたしの下宿まで、校正の原稿を自ら届けてもらったこともある。わたしの留学時代、目をつり上げて「アメリカの連中には負けないぞ！」と気張っていた時期、先生には何かにつけてよく面倒を見ていただいた。コンサートでガールフレンドとデート中に先生ご夫妻とぼったり出くわして、ドギマギしたことも懐かしい。そう、個人的な秘密を父親にみつかったような気分で、たとえば平凡だが、先生はわたしの留学時代の「父親」のような存在だったのだ。

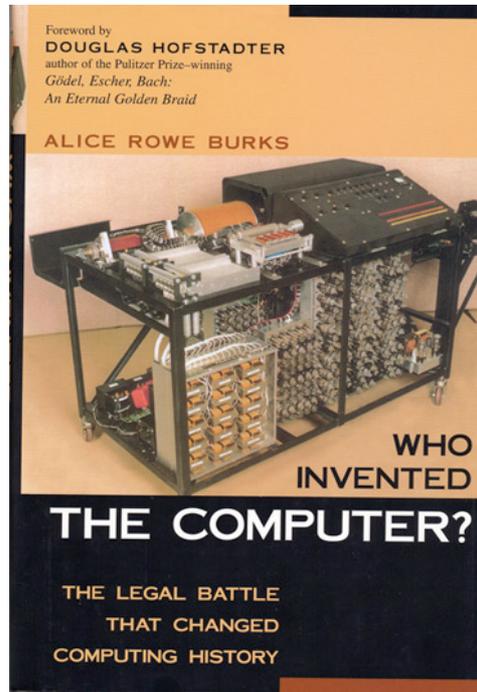
May 20, 2008: More on Burks

Here is a photo, Art Burks and myself, when I visited his house in the winter of 1991, while I was a visiting fellow at the Center for Philosophy of Science, Pittsburgh. At that time, he already retired from his chair, but was still working actively, on academic papers and academic duties, such as refereeing Ph. D theses. As a matter of fact, I was invited to a session for a candidate in computer science, one of Douglas Hofstadter's students (Hofstadter was back in Indiana, but he was present). On the board, John Holland and Daniel Dennett were also there.



On that occasion, Burks introduced me to a couple of computer scientists, and

arranged two talks by myself in the Philosophy Department, one on statistical mechanics (Larry Sklar kindly came) and the other on Sherlock Holmes. I met Stephen Darwall, Allan Gibbard, and Jim Joyce. Richard Brandt were still alive, and I caught a glance at him, while I was talking about Holmes.



May 21, 2008: Burks 2002-2004

わたしがバークス先生の家を訪れたのは、留学時代をのぞけば三度、1976年、1991年、そして2002年である。最後の機会となった2002年は、カミさんと一緒に、ピッツバーグから足をのばして、わたしのピッツバーグでの講演の前、3月に訪れた。アナーバーの冬は雪が多くて寒い、このときもピッツよりはだいぶ寒かったと記憶している。にもかかわらず、ご夫妻ともデトロイト空港まで迎えに来てくださって、膝を悪くして杖をついていた先生に代わって奥さんの運転だった。デトロイト空港は、ピッツバーグへの乗り継ぎですでに一度利用済みだったが、空港が新しくなってすぐだったので不具合が多く、われわれの荷物が出てくるのに時間がかかってイライラさせられたばかりだった。そういう悪口に花を咲かせながらアナーバーに到着、夕食後につもる話をいろいろと続けたのだが、先生の記憶の確かなことにはカミさん共々感心しきり、「この様子ではまだ当分大丈夫だ」と安心したのだ（当時、すでに87歳）。

そのうち話題がコンピュータの歴史におよび、奥さんが新しい本を書いたのに、受け入れ出版社を探すのに苦労したという話になってきた。ご夫妻は、前作『最初の電子計算機、アタナソフの物語』（1988）によって、旧友モークリー（ENIAC プロジェクトのナンバーワン）の盗作まがいの行動を暴き、アイオワで先行研究をしていたヴィンセント・アタナソフの業績をつぶさに調べ、また ENIAC の特許係争も綿密に調査して、アタナソフの名誉回復に大きな一石を投じていた。そのため、この労作を讃える人々だけでなく、多くの敵（なかでも、モークリー未亡人とエッカート、ENIAC のナンバー 2）をも作るようになった。『だれがコンピュータを発明したか』というタイトルのアリス夫人の新著は、コンピュータ史の専門家たちの見解を逐一検討し、裁判の記録ももう一度洗い直して、ご夫妻の見解に対する反論を論駁しつつ、自説を再擁護し、プログラム内蔵方式（俗に、フォン・ノイマン型といわれる）の先取権問題にまで踏み込んだもの。一読すれば明らかなように、文献考証などが実にしっかりしている労作である。アリス夫人のホンネは、「近頃の歴史家はレベルが下がったのか！」というものだった。この本は翌年によく出版されたのだが、ダグラス・ホフステッター（『ゲーデル・エッシャー・バッハ』の著者）の序文つき、フォン・ノイマンの娘さん（ミシガン大学で経済学の教授）の推薦つきでやっと出版を引き受けてもらったそうだ。

この本については、わたし自身も書評（PHS Newsletter No. 53）を書いたので参照していただけるとありがたいが、お世辞抜きで、包括的ないい本である。ご夫妻に対する攻撃に逐一反論しているのが「行き過ぎだ」という感想もあるかもしれないが、歴史家や評論家（エッカートよりの）からかなり激しく攻撃されたことも事実で、それは本文を読めばよくわかる。

ここまで長々と前置き準備したのは、その後 2003 年から 2004 年にかけての後日談を紹介するためである。アメリカの本家アマゾンでも、日本のアマゾンと同様に「読者レビュー」が盛んである。これは、控えめに言っても玉石混淆、しかも「石」の方が圧倒的に多い代物だが、アリス夫人の本に対する攻撃はひどかった。「モークリーの元秘書」と称する女性からの「書評」は、書評ではなくバークス本人や夫人に対するあることないことを並べ立てた執拗な（何度にもわたる）中傷と個人攻撃である。いわく、「バークスは ENIAC に対する自

分の貢献を無視されたためにアタナソフを持ち上げた」(バークス先生はナンバー3だったのだ)だとか、「バークスはいい人だったのに妻に感化されてモークリーを罪人に仕立て上げた」だとか、「裁判の前にモークリーを脅迫しに来た」といった調子である。こんな言いがかりは無視しておけば良さそうなのだが、バークス先生自らが「書評」の欄に自分で論駁を書いておられるので興味のあるかたはどうぞ。さすがに見かねた別の読者が「アマゾンよ目を覚ませ、こんな中傷を放っておくのか!」と一喝している。わたし自身も投稿したが、原稿は相当「検閲」されて短く切り詰められてしまった。「自由の国」アメリカも相当ひどいもので、オープンハイマー聴聞会のときも実に汚い手が政府や司法によって使われたのだ。

え、何が言いたいのかって? 定説や人の評価や噂を信用してはならず、自分の目と頭で確かめた上で判断する、という本道を忘れてはいけないということ。バークスご夫妻の人柄や誠実さは、わたし自身の何十年にもわたるつきあいでよくわかっている。

上の記事は、今年五月、バークス先生の訃報を受けてわたしのブログに掲載したいくつかの文章を一つにまとめたもの。

December 2, 2008. © Soshichi Uchii